

# 『夜の寢覚』における女君の人物造型

——作中歌の「月」を通して——

高井悠子

## 一 作中歌の「月」

『夜の寢覚』は、その物語の冒頭に「あさからぬ契りながら、世にこころづくしなるためし」とあるように、主人公女君が、姉の夫である男君との恋愛に苦悩していく悲恋物語である。女性を主人公とする物語であるという特徴もあり、女君に関しては、その人物造型を中心に研究が積み重ねられてきた。なかでも、女君が物語本文中においてかぐや姫に喩えられることを受けて、女君との関係における作中の「月」の重要性はすでに指摘されている。

特に作中の「月」の描写そのものに着目した先行研究として、加藤史子氏が女君の将来を「不幸な中の君の将来を不吉なまでに美しく光輝やく月に託し」たとし、女君と「月」の密接な関係を指摘している。さらに、作中歌の「月」については、鈴木弘道氏が欠巻部中の和歌を含めた百十三首のうち、「月」を詠みこん

だ和歌が十三首あることを指摘し、「その作者がよほど「月」に対して感受性が強かつたものと考へてよい」としている。

これらの先行研究における指摘を踏まえながら、あらためて現存部分の「月」を詠みこんだ和歌を検討し、この物語において女君が作中歌において月に喩えられることの意義を考察したい。その中で女君と誤認される但馬守三女との関係に着目し、その上で、但馬守三女の人物造型が女君に継承され、その後の物語の展開に影響を与えることを指摘していく。

まず、月を詠む作中歌十三首について、贈答歌の割合を調査すると、この十三首のうち十二首が互いに贈答関係にあることが判明する。乾澄子氏が、

『寢覚』の作中詠歌における特徴のひとつとして、成立しない贈答ということがあげられよう。贈答歌は七十五首中六十一首に及ぶが、そのうち成立する贈答は二十三組四十六首、十五首が返歌なしとなっている。これは心中思惟の増大

しているこの物語の特徴と重なり合っている。すなわち、コミュニケーションの不成立であり、それが心のすれ違いを生み出している<sup>①</sup>。

と考察されているとおり、『夜の寝覚』全体においては、贈答歌が成立しない傾向にあることを考慮すると、「月」を詠む和歌においては、贈答歌として詠まれた和歌がすべて成立することは一つの特徴と考えることができるであろう。

さらに、十三首の和歌の「月」の詠まれ方を確認すると、単純な自然描写はなく、「月」がすべて登場人物を指し示しており、さらにその人物は十三首中九首が女性であり、その割合の多さが指摘できる。ここでは、贈答歌においてまず、男性が女性を「月」に喩え、男性が喩えられる場合は先に女性が「月」に喩えられたその返歌に当ることが確認できる。さらに、「月」に喩えられる女性は、物語冒頭において女君と誤認される但馬守三女と女君の二人しかないということも注意を要する。

『夜の寝覚』には女君の姉大君や女君の女房である対の君や少将、中宮や石山の姫君、中間欠巻部以降には女一宮、大皇宮、老閑白の娘たちなど、他にも女性が登場するなかで、「月」に喩えられるのが前述の二人であることはその意味を考える必要性があらう。以後、「月」を詠みこむ作中歌は贈答歌として成立する確率が高いこと、また、その作中歌において「月」に喩えられる女性性は女君と但馬守三女の二人のみであること、の二点の問題点を

念頭におき具体的に場面を検討していきたい。

## 二 但馬守三女と作中歌の「月」

まず、最初の「月」を詠む作中歌の場面を挙げる。この場面は男女の出会いの場面であり、物語の主人公である女君ではなく、彼女と誤認される但馬守三女が「月」に喩えられている。

去年の秋ごろにやはべりけむ、石山に忍びて籠り合ひてはべりし人、思ふほどよりもよしならず、局などのけはひもてなしたりしかども、心にもとめず、ひとへに行ひはべりしに、暁にかかる月の谷の底さへ残りなくはべりしかば：（中略）：ことごとくもてなしかしづきて、あまはべりしなかに、目やすき人こそはべりしか。月の桂のそら目にやとは思ひながら、過ぐしがたくはべりて、下りぬめりと見送りて、<sup>①</sup>さやかにみつる月かなことならば影をならぶる契りともがな

と言はせはべりしかば、いととく、

②天の原雲居はるかにゆく月に影をならぶる人やなからむ

とこそ言はせてはべりしか」と語るを（巻一 四二―四三）

和歌①②を含む、石山での宮中将と但馬守三女の出会いの場面

である。宮中将から男君に語られる「好色物語」の中で、宮中将からの贈歌①と但馬守三女の返歌②が紹介される。当該場面では、まず、「去年の秋ごろ」の情景が描写され、贈答歌直前の宮中将の語りにおいて、「月の谷さえ」と月に関する情景が描写され、「月の桂のそら目」かと思いつながらも但馬守三女の「目やすさ」に惹かれて宮中将が和歌を詠みかけている様子が語られる。

宮中将は石山で目をとめた女が下山する折に「さやかにも」と和歌を贈り、女を「さやか」に見える「月」に喩え、「影をならべたい、つまり、契りを結びたいと伝えている。この女の返歌②「天の原」では、宮中将の和歌①を受けて、宮中将を「月」に喩え、相手の身分の高さを指摘し、「影をならぶる」ことはできないと返している。

宮中将がかつて経験した恋愛を男君に語る中で、「月」の描写がなされ、最後に二人の贈答歌を以ってその出会を象徴していることから、この場面において贈答歌は中心的な役割をはたしているといえる。つまり、ここでは宮中将・但馬守三女の恋愛譚が、「月」の贈答歌を主軸として、物語の主流である女君と男君の悲恋とはまた別に成立していることが看取できるのである。この場面は特に、『新全集』の頭注で「歌語りの土壌もこうした場であったろう」と「歌語り」を彷彿とさせる構成となっていると指摘され、場面構成上の和歌の重要性をうかがわせる。さらに、和歌①②に共通する「影をならぶる」という表現は、鈴木氏が「あまり例がない」と指摘しているが、このような希少な表現が贈答歌

に共有される表現となっていることも着目すべきであろう。

この出会いの場面において、月に喩えられた但馬守三女はその後、「好色物語」の後日談の中で、宮中将に「石山の月影」と呼ばれ、宮中将にとつて月は但馬守三女を象徴する言葉として認識されている。物語中の和歌ではない散文部分の本文においては、この場面より前に女君が「月」に喩えられる表現が確認できるが、和歌という表現技法の中では、但馬守三女が先に「月」に喩えられるその意義について検討する必要がある。

前述の出会いの場面のうち、宮中将と但馬守三女は恋愛関係にあつたものの、宮中将の身分意識などが原因で疎遠になる。婚約者も決まり、結婚の準備をすすめていた但馬守三女は、男君によつて女君と誤認された結果、結婚をとりやめ、中宮に出仕することとなる。このような状況のなか、宮中将と但馬守三女の二人が再会する。

雪降り、月いと明く澄みたる夜、殿上人あまた参りて、：  
(中略)：居たる東面にさりげなく尋ね寄りて、

③「石山の峰に隠れし月影を雲のよそにてめぐりあひぬる

なまめきて、いと忍びやかに言ひたるに、え聞き過ぐさで、  
④雲居にはすむ空ぞなき月なれば谷に隠れし影ぞ恋しきとて、やをらすべり入りて、局に紛れおりて、  
おほし出づや。あはれなり」と、けはひも様も、人よりはな

つかしく

(巻一 六九)

雪が降り、月が明るい冬の夜、宮中でかつて恋人であった但馬守三女を見つけた宮中将は、石山での出会いを思い出し、「石山の」と和歌③を詠む。二人の記憶にある出会いの場面の贈答歌を想起させるように、「石山」という歌枕<sup>8</sup>からはじめ、但馬守三女を「峰に隠れし月影」に喩え、その「月影」に「めぐりあ」った感慨を詠みかけている。これに対して、但馬守三女は現在の我が身を「月」に、昔の我が身を「谷に隠れし影」に喩え、昔の我が身を「恋し」く思っていることを伝え、「やをらすべり入り」、返歌はするものの、宮中将に靡く様子をみせない。つまり、一度疎遠になった二人が再会する場面は、出会いの場面の和歌①②を意識した二人の贈答歌を中心に描かれており、一連の恋愛譚が成立しているのである。

さらに、再会の場面の和歌④の「雲居には」の直後には次に挙げる但馬守三女の独詠歌が確認できる。

「…峰に隠れし」とい言ひつる返り事を、いかで答へ出でつるぞ」と、うとましく思ひつづけて、

「知らざりし雲の上にもゆきまじり思ひのほかにはすめばすみけり

かなはざりける」と、忍びやかにながめ出でて居たれば

(巻一 七〇)

「知らざりし」の和歌は、④の返歌後、但馬守三女が局に戻り、宮仕えという思いがけない我が身に思いを馳せ、物慣れて④の返歌をしたことを「うとましく」思う感慨が詠まれている。今まで知らなかった宮中に意外にも慣れてしまった自分自身にあきれる心情を詠んだものとされている。この独詠歌では、「月」や「月影」等の直接的な表現は確認できないが、宮中に「住む」の意味に加えて月が「澄む」の意を掛けているという指摘もあり、但馬守三女が詠んだ和歌④に続く感慨であることを考えれば、「月」のイメージを含む和歌と考えることが適切であろう。むしろ直接的に詠まれず、連想させることよって、二人の恋愛譚であることを示しながら、宮中将との関係から脱した但馬守三女の姿を読み取ることができる。

このように、再会の場面の結びともなり、また、宮中将・但馬守三女恋愛譚の終結を意味する「知らざりし」の和歌にはもう一つの趣向が確認できる。和歌直後の「かなはざりける」という表現は、伊井春樹氏<sup>10</sup>によって引歌形態の一種である「添え句」であると指摘され、『小町集』<sup>11</sup>の「心にもかなはざりける世の中をうき身はみじと思ひけるかな」の表現を用いたものとされている。これは「和歌に古歌の一句を添えることよって、作中人物の心内をさらに深め、展開する方法」と指摘され、これが独詠歌に添えられる場合は「物語史における独詠歌の最も高度に発達した方法」とされる。

この「かなはざりける」は、自らが意図していなかった現実に

対して「どうにもならないことだった」というあきらめの感情を表していると解釈できるが、『小町集』の「心にも」の和歌を視野にいれることで、それが出仕に対してのみではなく、世の中、つまり、宮中将との恋愛に対する感慨とも解釈できることになる。実際、「知らざりし」は宮中将への返歌をしたことを「うとましく」思つて詠んだ和歌であり、但馬守三女の心理と呼応する。

よつて、但馬守三女の独詠歌の場面からは重要な点が三つ指摘できる。一つ目は直接的には詠まれないものの、「月」を連想させる和歌となつてゐること、二つ目は、贈答歌ではなく独詠歌として、但馬守三女自身の境遇を嘆き、宮中将との恋愛の終結を予感させること、三つ目が「添え句」という技法により独詠歌の内容を強調するとともに、宮中将との関係に対する言及ととらえることができることである。これらのことから、独詠歌の場面も含めて、宮中将と但馬守三女の出会い、再会の場面によつて、和歌を主軸として「歌語り」を思わせる方法で構成され、但馬守三女は宮中将との関係性の中で「月」喩えられる女性として描かれてゐることがわかる。

『夜の寢覚』では、但馬守三女と宮中将の恋愛を、月を詠みこむ贈答歌を中心に描くことで、但馬守三女を「月」に喩えられるべき女性、すなわち、女君に誤認されるべき人物として造型してゐると考えられる。但馬守三女は、男君と女君の恋愛とはまた別の、『夜の寢覚』が内包するもう一つの物語のヒロインとしての役割を与えられ、誤認問題の発生・終結に関して物語構想上の重

大な役割を担つてゐるといえる。つまり、この物語の悲恋の原因ともされる誤認問題は、供の行頼が男君に但馬守三女の情報を伝えたことを契機として発生し、宮中将・但馬守三女恋愛譚を内包しつつ、この恋愛譚が終結することによつて誤認問題も終結できるといふ構造になつてゐる。

第二章では作中歌の①から④を含む場面を取り上げ、「月」の和歌を通して但馬守三女のこの物語における役割を指摘してきた。「月」を詠む十三首のうち最初の四首がこれまで検討してきた宮中将・但馬守三女恋愛譚のなかの贈答歌であつたことは重要である。この但馬守三女と月の問題は誤認問題のみならず、問題解消後の女君にも影響を与えていくことになる。

第三章ではこれらを踏まえて、但馬守三女の退場後の作中歌において「月」に喩えられることになる女君に関する場面を検討する。

### 三 中間欠巻部以前の女君と作中歌の「月」

男君が九条で出会つた女性が但馬守三女ではなく女君であると知つたのは、すでに女君の姉である大君と結婚した後であつた。同じ屋敷内に暮らす義理の妹が恋焦がれてきた女性だと知り、男君は苦悩する。九条における男君との一夜以来、病床にあつた女君も男が姉の夫であること、女君自身が妊娠していることを知り、嘆きの日々が続く。女君は石山で男君の子である姫君を出産

し、姫君は男君の実家に引き取られる。男君は女君に対してますます思いを募らせ、女君の部屋のあたりを訪ねる日もあり、ついに、二人の關係が男君の正妻大君側の人々の噂にのぼるようになる。この噂に耐えかね、女君は父のいる広沢に身を寄せることになる。

さすがに、姨捨山の月は、夜更くるままに澄みまさるを、めづらしく、つくづく見出だしたまひて、ながめ入りたまふ。

⑤ありしにもあらず憂き世にすむ月の影こそ見しにかはらざりけれ  
(卷一 二〇五頁)

この広沢の場面では、女君は月の様子に心が惹かれ、心境を独詠歌の形で吐露する。和歌の直前には「姨捨山の月」という表現があり、古歌「わが心なぐさめかねつさらしなやをばすて山にてる月を見て」から「なぐさめかね」る心情を表している。ここでは、女君は自身の身の上を「ありしにも」と独詠し、「憂き世にすむ月」に喩え、変わらぬ「月」に対して、わが身の変化を嘆いている。

和歌⑤には、前章で検討した但馬守三女の返歌、④「雲居には」との類似点を確認できる。和歌の内容とともに、表現に着目すると、和歌④⑤ともに詠み手の女性自身が我が身を「月」に喩えており、過去の助動詞「き」の連体形である「し」、掛詞となっている「すむ」、「月」、「影」など類似点を確認できる。

このような表現の類似とあわせて、詠み手の心情にも着目すると、和歌④で但馬守三女は宮中にいる現在と比較し、家にしたころの自分を「恋しく」思う一方で、和歌⑤では、昔あった状態とは異なる現状の女君自身を「憂き世」に住むといい、九条での一見以来の自分とそれ以前の自分を比較する。現在の自分と昔の自分を「月」を媒体にして比べることによって現状を嘆いているのである。自分が本来あるべき場所にあらず、現在の自らの状態を昔と比較して嘆くという点が一致しており、異なる境遇にありながら、女君は但馬守三女と歎きを共有するように物語が設定されていることがわかる。

次に女君自身ではなく、周囲の人々によって女君が「月」に喩えられている例を検討する。

心弱く、うち忍ばれで、

⑥めぐりあはむをりをも待たず限りとや思ひ果つべき冬の夜の月

いとさやかに、様体をかしげなる人の、白き衣どものうへに濃き搔練着て、あざやかなる裳ひきかけて、わざと言ふともなくうり紛らはして、いみじう心苦しう思ひ入り、ながめ出でたる、月影のけはひなつかしく…(中略)…え乗りもやられたまはず。

⑦こよひだにかけ離れたる月を見てなほや頼まむめぐりあふ夜を  
(卷一 二二五―二二六)

広沢に男君が雪のなかを訪ねてくるも、女君付の女房が会わせないようにはからうなかで、女君に会えないまま朝になって帰る男君を見て、女君の女房である少将が再会の機会をほのめかして「めぐりあはむ」と和歌⑥を詠む。ここでは女君を「冬の夜の月」に喩え、男君が女君に「めぐりあ」う機会をほのめかしている。これに対して、男君は和歌⑦で女君を「かけ離れたる月」に喩え、再会の機会を頼みしている気持ちを表している。

これら⑤から⑦の場面から、作中歌に着目した場合、女君は広沢においてまず「月」に喩えられていることがわかる。和歌以外の本文もあわせて考えると、広沢以前にも関白邸、九条の屋敷等でも「月」と女君との関係性を見出すことができるが、和歌という文体に焦点をあてた場合、別の意義が浮かびあがる。中間欠巻部以前の女君に関する検討を通して、女君の独詠歌⑤、男君と少将の贈答歌⑥⑦からは、男君と女君の贈答歌は成立しないこと、そして、三首とも女君を「月」に喩えていることが指摘できる。女君自身によっても、他人によっても「月」に喩えられる女君は、物語作者によって但馬守三女との類似性をその和歌の表現によってもたらされるが、欠巻部以降はどのように人物造型されていくのであろうか。

#### 四 中間欠巻部以降の女君と作中歌の「月」

中間欠巻部以降には、帝闖入事件や生霊事件など、女君を追い

詰める事件が立て続けに発生するが、次に挙げるのはこのうち帝闖入事件に関する場面である。

なほ、「いみじのわざや」と、御涙を尽くさせたまひつつ、

⑧雲のうへにすみはつまじき月を見て心のそらになりは  
つるかな

御供の人々の聞くらむほども、いとわりなく苦しきに、きこえさせむかたなけれど、ただ、疾くのがれ出でなむとおぼすに、心をのべて、

⑨雲居にはおよばざりける身を知ればしばしもすむに影ぞまばゆき

言ひも果てぬやうにて、せめて、すべり出でたまひぬる名残、とばかり見送らせたまひて (巻三 二八六―二八七)

中間欠巻部中に、女君に思いを寄せていた帝は女君に入内を要請するも、女君は代わりに老関白の娘である督の君を入内させ、女君もその母親役として宮中に滞在している。それまで帝を避け続けてきた女君が、宮中で帝にとらえられ、おいつめられた状況で男君への愛を自覚する場面として重視されてきた帝闖入事件である。ここでは帝から逃れる直前の和歌において、帝が女君を「すみはつまじき月」に喩えて、女君のつれなさを怨み、女君は帝を和歌⑨で「月影」にたとえ、宮中における自らのきまり悪さを伝えている。

この場面の和歌⑧⑨には、すでに検討した和歌③④との類似点が指摘できる。中間欠巻部以前の場面は宮中将と但馬守三女の贈答、この場面では帝と女君の贈答となっているが詳しく検討してみよう。まず、対応する場面の和歌④、和歌⑨の女性の返歌に注目する。両者ともに、「雲居には」で始まるが、「雲居には」で始まる和歌は『夜の寢覚』中この二首のみであり、他の王朝物語や八代集にもないことから、物語作者が意図的に用いたと考えられる。さらに、和歌④⑨の表現を確認すると、「ば」「すむ」「かげぞ」という表現が共通している。表現上の類似のみならず、和歌④では但馬守三女が宮中での住みにくさを詠んでおり、同様に和歌⑨では、女君は宮中にそぐわない女君自身の立場を帝に訴えている。

また、男性側の贈歌③⑧に着目すると、和歌③では相手の女性を「峰に隠れし月」、和歌⑧では「すみはつまじき月」に喩えて女性のつれなさを恨む表現を用い、さらに和歌③の「雲のよそ」は和歌⑧の「雲のうへ」に対応している。宮中将の和歌③はかつて関係があった但馬守三女に再会できたことの喜びを詠み、帝の和歌⑧はどんなに心をつくしても自分に靡かない女君のつれなさを嘆く和歌になっているため、和歌の主題としては異なるものの、二つの場面の表現上の類似は注意を要する。

これらの場面の類似点を指摘する上で重要なことは、和歌一首のみではなく、贈答歌として考えることである。中間欠巻部以前の宮中将・但馬守三女恋愛譚と、中間欠巻部以降の帝と女君に関

係は、ともに身分の高い男性が身分の低い女性に和歌を詠みかけるという構図になっており、宮中将と但馬守三女の関係性が帝と女君との関係性に投影されていることが確認できる。

次に『夜の寢覚』の重大な事件の一つである生霊事件に関する場面を検討する。

「すみ果つまじき契りなりけむ」とながめわび別れし暁など、所も変はらず、空の気色なども同じながらなるに、その折の心尽くし、今さへ胸ふたがりつつ、泣きみ笑ひみとかいふにも尽きせぬ御仲あはれなり。

⑩古里に面変はりせでめぐりあへる契りうれしき山の端の月

(中略)

亡き昔のみ恋しく、「我は我」とうちながめられて、

⑪山の端の心ぞつらきめぐりあへどかくてのどかにすまじと思へば (巻五 四八七―四八九頁)

女君は、中間欠巻部以降、亡き老関白の北の方として一家の采配をふるう身となった。一方、男君にも正妻女一宮がおり、それぞれに家庭を持つ身となっている。女一宮が病臥した際、女君が生霊と化して憑りついたという噂が流れ、その後、精神的苦痛によつて都を去り、女君は父が隠棲していた広沢に身を寄せる。生霊事件を契機に物語冒頭以来の様々な苦難に思いを馳せ、厭世観



を募らせて、出家を決意するに至る。その出家を止めやうて来た男君と、女君が久々に面会し、男君と女君が二人寄り添って昔を思い出し、和歌を詠みあう場面である。

男君と女君の和歌の贈答歌により、双方の心情が対照的に描き出されており、帝との関係に嫉妬し、帝の手紙があるたびに女君を責め立てる男君に対して、女君は「恨めしき節多く、心劣りしたまふべき人」とその短所を指摘し、「亡き昔のみ恋しく」と亡くなった老閨白を思い出す。生霊事件以後、女君の心は男君から離れていき、生霊の噂に苦しみ、人生を内省した女君は、老閨白との思い出に救いを求め、女君は「我は我」と男君から精神的に離れようとする。

また、男君の贈歌⑩「古里に」では女君と共にある現在を「契りうれしき」と表現していることに対して、女君は返歌⑪で男君の「心」が「つらい」としており、同じく「山の端の月」を詠んでいるものの、二人の心情は相反している。和歌⑩、⑪は男君と女君は互いを月に喩え合う贈答歌の形式をとることで、二人の心理的な乖離を浮き彫りにする。

この和歌⑩において、互いを「山の端の月」に喩える背景には、中間欠巻部の男君の和歌「あはれなどかげをならべて山のはにすみはつまじき契りなりけん」<sup>13</sup>がある。この和歌は、中間欠巻部において、老閨白に嫁ぐ直前に男君と心が通じて逢瀬があり、その際に詠んだ女君の和歌で、周囲の状況から引き裂かれざるを得なかった心情を詠んでいると考えられる。この和歌は中間欠巻

部中で女君が老閨白に嫁いだ後にも欠巻部中に「いし山にてすみはつまじきちぎりなりけむときこえし」<sup>14</sup>と男君によって思い返されている。

この欠巻部中の「あはれなど」の下の句の「すみはつまじき」を引用することで、和歌⑩⑪の山の端の月は、中間欠巻部の和歌を連想させ、和歌⑩⑪は中間欠巻部以来の来し方の経験も含めた感慨となる。このことは、登場人物の心情の問題とともに物語の構成の問題としても注目されよう。

中間欠巻部中の「あはれなど」の和歌は物語中において回想される場合にはその下の句の「すみはつまじき」が本文中に引用されているが、その上の句に着目すると「かげをならべて」という表現が確認できる。この表現は第二章で検討した宮中将と但馬守三女の出会いの場面における贈答歌のキーワードとなっていた。このことは、巻五の秋の石山の里で男君と女君が和歌を詠みかわすことの背景に和歌①②があり、宮中将・但馬守三女の恋愛譚と女君と男君の恋愛と和歌①②との関係性をうかがわせる。

次に、物語現存部分最後の和歌であり、月を詠んだ和歌を含む場面を検討する。

「<sup>15</sup>もこそあらめ、ひきかへし、いささかも御心の直らで、御覧し捨てて引き入らせたまひしつらさ」を、おどろおどろしく書きたまひて、

⑫かきくらし昔を恋ひし月影に我中空に泣く泣くぞ来し

とあるを、「今めかしのさまや」と見たまひて、

⑬ なかなかに見るにつけても身の憂さの思ひ知られし夜

半の月影

とのみあるを、うちも置かず見居たまへり。

(巻五 五四二―五四三)

女君は広沢で男君の子の妊娠が発覚した後、洛中の男君の邸宅に迎えられる。女君は世間からも男君の妻と認識されるようになる一方で、その屋敷には男君の正妻女一宮も住んでおり、女君の悩みは深まる。そのような日々の中で帝から女君に対して手紙が届けられ、男君が嫉妬のあまり、女君を追い詰める。度重なる男君の嫉妬にあい、思慮のあった老閑白の態度が思い出され、女君の心は老閑白に移る。女君への反省と恨みの手紙に書かれた和歌が⑫である。

老閑白のことはかり思い返している女君を「昔を恋し月影」に喩え、自らの心細さを訴える。それに対して女君は男君が訪れてきたことよって「身の憂さ」を知ったと訴え、夜分に訪れ来た男君を「夜半の月影」と表現している。この場面は前述した巻五の場面と同様に女君の心が今は亡き老閑白に寄せられている中で贈答され、男君との贈答歌をかわすものの、その心が満たされることはない。

以上、検討してきた通り、中間欠巻部以降では、⑧から⑬の六首の和歌があり、帝闖入事件、生霊事件とともに「月」の和歌が

詠まれてきたが、ここではすべてが女君の贈答歌として成立していることは重要であろう。これらの贈答歌は宮中將と但馬守三女の贈答歌が投影されており、それが帝のみではなく、男君の関係においても指摘できる。従来、但馬守三女は、第一部の誤認問題のため設定された人物と考えられ、実際、誤認問題の終了とともに彼女が物語上から姿を消す。しかし、但馬守三女が物語から退場したのちも、女君の心情、もしくは物語展開に影響を与えていることが指摘でき、そのことは作中歌の「月」によって見出すことができるのである。

女君はその美貌、もしくは出自の上から本来こうむるはずのなかつた苦難もしくは批判にさらされることになり、それが物語全体を支配していくとはすでに拙考<sup>5)</sup>でも指摘した。物語中女君の苦悩は続くが「苦悩しつづける女君」という人物造型は、但馬守三女の人物像が投影されることよってなされたと考えられる。

本稿では「月」を題材にする和歌に焦点をあてることで、『夜の寝覚』の和歌による物語の構想を指摘してきた。それは物語の生成の在り方とも関係し、歌物語とはまた異なる形で和歌を主軸とした物語の生成の在り方をする中世王朝物語の構想につながる発想であると考えられよう。

\*本稿は、二〇一四年九月十三日(土)の第三十八回中古文学会関西西部例会(大阪教育大学天王寺キャンパス)の口頭発表を文章化したものである。会場でご教示いただいた先生方

に感謝申し上げる。

注

- (1) 『夜の寢覚』の本文等はすべて『新編日本古典文学全集』（小学館）による。以下、同書を『新全集』とする。
- (2) 『寢覚』と自然描写―月を中心に（高野山大学国語国文）十五・十六号 一九八九年十二月。ほかに、渡辺純子氏「夜の寢覚」における「月影」「火影」（『古代文学研究』（第二次）九号 二〇〇〇年十月）、木原範子氏「夜の寢覚」研究―寢覚の上にとつての月の存在」（『広島女学院大学国語国文学誌』十七号 一九八七年十二月）等もある。
- (3) 「寢覚・浜松の歌と菅原孝標女の歌との比較」『寢覚物語の基礎的研究』一九六五年 塙書房。
- (4) 「夜の寢覚―作中詠歌の行方―」『物語の方法 語りの意味論』糸井通浩・高橋亨氏編 一九九二年 世界思想社。
- (5) 便宜上、筆者が『夜の寢覚』の「月」を詠む作中歌に番号を付した。以後の番号も同じ。
- (6) 注(3)に同じ。
- (7) これ以降は女房名の新少将と呼称を改めるべきだが、便宜上但馬守三女として統一する。
- (8) 「石山」は歌枕であるが、「石山」自体が和歌に詠まれることは少なく、勅撰和歌集においては『新古今和歌集』が

初出であり、『夜の寢覚』以前の和歌は『公任集』に一首確認できる程度である。

- (9) 「月が「雲の上」に「澄む」意を掛ける。」（『日本古典文学大系』）、「雲の上に禁中を、「雪まじり」に「行きまじり」を、「住む」に「澄む」をかける。」（『増訂寢覚物語全釈』）、「月が「雲の上」に「澄む」意をかける」（『新編日本古典文学全集』）などの指摘がある。
- (10) 伊井春樹氏「物語における和歌―独詠歌の展開―」伊井春樹氏『物語の展開と和歌資料』二〇〇三年 風間書房
- (11) 「新編古今和歌集」恋歌五 一五〇四番にも所収。物語以外の歌集の本文はすべて『新編国歌大観』による。
- (12) 『古今和歌集』雑歌上、よみ人知らず。
- (13) 「夜の寢覚抜書」『寢覚物語欠巻部資料集成』（二〇〇二年 風間書房）による。
- (14) 『拾遺百番歌合』十番。
- (15) 「夜の寢覚」における女君の人物造型―「浮名を流す」女君―（『平安文学研究 衣笠編』四号 二〇一三年三月）、「夜の寢覚」における女君の人物造型―「卑しい身分の女」としての女君―（『立命館文学』六三〇号 二〇一三年三月）

（たかい・ゆうこ 芭蕉翁記念館学芸員）

『夜の寢覚』における女君の人物造型